

「国際人」黒田礼二～高知との関係を中心に

依 岡 隆 児

Der Kosmopolit Reiji Kuroda –eine Betrachtung über  
seine Beziehung zu Kochi

YORIOKA Ryuji

言語文化研究 徳島大学総合科学部

ISSN 1340-5632

第24巻 別刷 2016年12月

Offprinted from *Journal of Language and Literature*

*The Faculty of Integrated Arts and Sciences*

*Tokushima University*

Volume XXIV , December 2016

「国際人」黒田礼二～高知との関係を中心に

依岡隆児

Der Kosmopolit Reiji Kuroda –eine Betrachtung über  
seine Beziehung zu Kochi

Ryuji YORIOKA

**Abstract**

In diesem Aufsatz möchte ich über den Journalisten Reiji Kuroda, der nach dem Ersten Weltkrieg in Berlin lebte, nachdenken, indem ich hier seine Beziehung zu der Heimat Kochi in Betracht bringe.

Man schätzt ihn als internationalen Vagabund, als Übersetzer von der deutschen expressionischen Literatur, oder als pro-nazistischen Journalisten. Aber seine Beziehung zu seiner Heimat ist noch nicht so bekannt. So versuche ich hier zu betrachten, wie er, ein kosmopolitischer Vagabund, die dunkle Zeit durchlebte, vor allen unter dem Gesichtspunkt auf seine Beziehung zu der Heimat.

Sogleich versuche ich zu denken, was für ein Mensch der wahre Kosmopolit sei. Ist er eigentlich ein Kosmopolit oder nur ein Vagabund? Hier möchte ich durch Kurodas Lebenlauf darüber nachdenken, wer der eigentliche Kosmopolit sein soll.

はじめに

黒田礼二については、すでにそのドイツ文学の翻訳者としての側面や、ベルリンなどを舞台に記事やルポルタージュを書いたジャーナリストとしての面では知られているが、その生涯についてはよくわかっていない。後世の評価も、表現主義文学の紹介者・翻訳者として文学の面での先駆的業績を高く評価する者や、親ナチス的人物と見る者、あるいは国際的放浪者とする者がいるなど、一定ではない。

黒田礼二研究においても、彼の高知での幼少時代やその後の高知との関わりについては、ほとんど扱われてこなかった。この点については、渡辺盛男氏の『小伝 黒田礼二こと岡上守道』<sup>1</sup>が唯一の文献となっている。これはふるさとである高知・大豊との関連を中心に、黒田の養父の孫にあたる三谷泉水（元大豊町長）からの聞き取りから報告したというもので、貴重な資料である。筆者はこのたび渡辺氏にお会いして、その経緯をお聞きすることもできたが、残念ながら黒田についての資料は『大豊町史』以外には、見つけられなかった。ただ高知に帰ってきた晩年については、黒田が『高知新聞』に勤務したことがあるので、『高知新聞』の社史や記事検索によって、かろうじていくつかのを知ることができた。生前の写真が掲載されている記事もあった。また、その妻の版画集も見つけられた。そこで、以下、これらをもとに、黒田礼二の高知との関わりについての調査の経過報告をする。

それとともに、本論では黒田の「国際人」としての側面についても考察したい。黒田の足跡を追うと、彼が国際派の知識人として常に激動の時代の先端にいたことがわかる。その意味で、戦前から戦中にかけての日本を外からの視点でとらえた貴重な証人でもある。筆者の黒田への関心は、その「国際人」としての稀有な存在が戦争という危機の時代においていかに変節を遂げていったかということにある。語学力・コミュニケーション能力にたけ、世界の諸事情に通じ、幅広い視野を持っているという定義によれば、黒田はまさに「国際人」だった。そうした「国際人」として活躍しながら、彼がナチスに共感していったのはなぜなのか、

<sup>1</sup> 渡辺盛男『小伝 黒田礼二こと岡上守道』大豊村教育委員会、1978年、高知県立図書館蔵。

そしてなぜ故郷・高知と最後にいたるまで関わりを持とうとしたのか。その生い立ちと後の「国際人」としてのあり方とは関連があるのではないか。そうした疑問から、黒田礼二の存在を探り、現代における「国際人」のあり方について、その負の面も含めて、考えるヒントを得たいと思う。

## 1 黒田礼二とは

ドイツと日本との関係は、二つの大戦間で敵国から同盟国へと、激変した。そしてその間に身を投じて荒波に翻弄された人も多かったが、黒田礼二もそのなかの一人だったといえよう。

黒田礼二（1890年～1943年、本名は岡上守道）は高知県長岡郡大篠村（現・南国市）生まれのジャーナリストだった。旧制第一高等学校に進学後、東京帝国大学に入学、法科経済を優秀な成績で出た。満鉄東亜経済調査局に就職、ソ連関係の調査に従事し、ソ連通として知られた。

黒田は当時、ソ連の革命を見、社会運動にのめり込み、東亜経済調査局と一緒にいった同級の佐野学らとともに新人会に参与していた。宮本百合子の『道標』（1948年～1950年）で「肥田禮二」という登場人物は黒田がモデルだったとされる。そこからは、宮本百合子が1927年末にモスクワ滞在中に同じくモスクワに来ていた黒田と懇意となったこともうかがえる。<sup>2</sup>

やがてベルリンに住むようになり、そこから日本へドイツの政治社会事情の記事を送った。『デモクラシイ』『解放』『改造』に寄稿、「蝙蝠通信」（「伯林通信」）を書く。これは後に、単行本『蝙蝠日記』（大鏡閣、1922年）として出版され、ベルリンの貧民街のルポルタージュとして話題を呼んだ。1923年、朝日新聞社の囑託特派員となり、1928年に同社の社員となって、1932年までベルリンに滞在した。

ベルリン滞在中の黒田にはドイツの文学作品の翻訳がある（ビュヒナー『ヴォイツェク』の本邦初訳、トラー『変転』、カイザー『瓦斯』（築地小劇場で上演））。<sup>3</sup> ドイツの即物主義的作家で反戦作家だったレ

<sup>2</sup> 参考、笠間啓治『散策のモスクワ』ナウカ、1992年。

<sup>3</sup> 黒田の表現主義関係の翻訳は、『転変：表現派代表戯曲』（大鏡閣、1922年）、『表現派戯曲集』（群集人間：エルンスト・トラア、海の戦い：ゲーリング、瓦斯：ゲオルク・カイザー、朝から夜中まで：ゲオルク・カイザー）（叢文閣、1924年）、『どっこい、生きている』（トラア）（平凡社、1930年）（世界プロレタリア傑作選集）などで

マルクの「その後に来るもの」を、1930年から1931年まで204回、『朝日新聞』に訳載している。またレマルクにインタビューも行っている。<sup>4</sup>日本での表現主義受容の本格化する前から「『スツルム』運動」という記事を『解放』1921年5月号に発表し、表現主義受容に一役買っていた。<sup>5</sup>また、黒田は短篇小説を雑誌『新青年』などに寄稿している。ハンブルクを舞台にした短篇「マルコ・ポーロの末裔」を『新青年』1936年5月号に発表した。<sup>6</sup>さらに、同誌1938年12月号には「スロヴァキアの娘」を発表、欧州動乱の発火点チェコスロバキアに取材し、この国がドイツに併合される悲劇を女主人公ヤンカの運動と絡ませながら描いている。

黒田は1934年から35年にかけて再度ベルリンに渡る。帰国後、雑誌『日独旬刊』を発行し、ドイツ事情を紹介した。このころ、ファシズムに強い共感を抱き始め、ヒトラーに会ったこともあった。ナチス寄りの言論を展開、ゲッペルスと会ったり、『血と土』を翻訳したりするなど、ナチスのイデオロギーに感化されていた。1939年には『日独防共協定の意義』という冊子を日独同志会という団体で発刊、この親ナチスの組織に会員を募ってもいた。また、2回、ヒトラーにインタビューをしている。そのことが『朝日新聞』の1932年1月3日「とび色の家から号令 70万党員の総統 ヒトラー氏～世界のナンバーワンとほがらかに語る」と、1935年1月27日「新興独逸の独裁者 ヒトラー総統と語る 片言隻句に日本への関心 本社黒田特派員会見記」という記事になっており、後者には黒田の顔写真も載っている。

前衛的作品に理解を示し、レマルクなど反戦的・反ナチス的な作家の翻訳を手がけてきた彼が、なぜナチスのイデオロギーに惹かれていったのだろうか。当時は、こうしたコミニズムからファシズムへという転

ある。なお、黒田については、中村采女「あるドイツ文学紹介者—黒田礼二について—(一)(二)(三)」、早稲田大学理工学部、一般教育、第33号、37号、38号、1993年、1997年、1998年。の論文がある。

<sup>4</sup> このインタビューは、『朝日新聞』に連載され(1930年11月8日、同年11月9日、同年11月10日、同年11月11日、同年11月12日、同年11月13日の6回。そのうち6回目にはレマルクと黒田、黒田夫人の3人が写っている写真が掲載せられている)、翻訳単行本(レマルク『その後に来るもの』朝日新聞社、1931年)の巻末に再録された。

<sup>5</sup> 鈴木貴字編『表現主義』(『コレクション・モダン都市文化』第20巻)ゆまに書房、2007年。

<sup>6</sup> 海野弘編『モダン都市文学』IX(『異国都市物語』)平凡社、1991年に収録されている。

向自体は、決してめずらしいことではなかったとはいえ、黒田の場合は、彼が外国で暮らしていたという点で特殊な例だろう。また、同じジャーナリストでも、反ナチを貫いた鈴木東民とは対照的である。あるいは、これは思想的な「転向」ではなかったのかもしれない。

むしろ、妻と子どもを抱え現実的に、ナチスと日本の軍国主義に迎合することに活路を見出そうとしたのではないか。ベルリンの下層の庶民たちの中に入り込みルポルタージュを試みたり、この時期、「スロヴァキアの娘」のような大国ドイツに蹂躪される小国の女性の政治運動を取り上げたりするという矛盾した動きが、そのことを物語っている。この黒田については、嘉治隆一『歴史を創る人々』の「数奇伝」の中で「プチブル」であり、「国際的ヴァガボンド」であると紹介されている。<sup>7</sup>

戦時中の1942年には、大政翼賛会からの推薦なしで、無所属で衆議院議員に立候補し落選する。1943年に海軍に招集され、南方のパルプの国策会社の経営に参加していたが、出張中、セレベス沖で潜水艦の魚雷で命を落とした。

## 2 岡上守道から黒田礼二への足跡

先述の渡辺盛男『小伝 黒田礼二こと岡上守道』によると、黒田礼二こと岡上守道は安芸市で捕鯨会社を経営していた父・岡上周蔵を早くに亡くした。後に教師の資格を取った母・免恵が二人の子を育てるために、東豊永村（現・大豊町栗生）に移り、そこの裁縫学校の教師をした。姉がいたが、18歳で亡くなっている。母親はそこで三谷彦右衛門という土地の実力者と再婚した。守道は岡上家を幼くして相続していたので、三谷の籍には入れられていない。

尋常小学校を出て、勉強のできた守道は養父からは師範学校に行くようにと言われていたが、上級学校に行くことを強く主張した。そこで、母は実弟・小原与にこのことを相談した。もともと県庁の土木技師だったが、当時は内務省の技師として大阪にいたこの叔父が、彼を大阪の中学に通わせた。守道は二度と故郷の土は踏まないと言っていたともいう。<sup>8</sup>ところが小原与が高知の県庁にもどってくるに合わせて、守道も高知市に引っ越してきた。そこの高知第二中学校に転校し、優秀な成績で

<sup>7</sup> 嘉治隆一『歴史を創る人々』大八洲出版、128頁。

<sup>8</sup> 同書、128頁。

卒業している。

三谷家では母の連れ子という立場だったため、家を出て中学校に進んだが、そのときは家督を継いだ岡上家には頼らず、母の実家の方から学資を出してもらっていることになる。その際に、大阪の一義侠に見込まれて、中学校を出させてもらったともいう。<sup>9</sup> 岡上家との関係は良好ではなかったのかもしれない。後年ドイツから一時帰国したときにも、三谷家と小原家には寄宿したようだが、岡上の方には足を向けた形跡はない。たしかに、彼の先妻の子は岡上家の籍に入れたばかりか、再婚相手のドイツ人も帰化したときにはこちらの籍に入れている。ところが、この妻も戦後、守道の遺骨を持って行ったのは、岡上家ではなく、三谷家の方だった。現在は大豊栗生の三谷家の墓所に母の墓の横に「岡上守道」として葬られている。このことは、筆者も現地に行き確認できた。筆者には、戦後妻のシャルロッテが持ってきた遺骨を入れた岡上守道の墓は、三谷家の墓が並ぶなか、異質に思えた。(巻末図1の墓の写真参照)

この再婚相手のドイツ人というのは、黒田がベルリンでの特派員時代、1928年に結婚した女性である。画家志望で、シャルロッテ・コルベルクという名だった。<sup>10</sup> 実は黒田にはすでに日本人の妻と娘がいたが、このために妻とは協議離婚をしている。

シャルロッテ・コルベルクは日本国籍を取得し、黒田との間に娘(アントニア浪江)をもうけた。1928年に黒田はこの妻子ともに一時帰国している。母の嫁いだ三谷家や母の実家の高知市の小原家に身を寄せ、小学校で講演をしている。その際、シャルロッテのドイツ語と通訳する黒田のしぐさが面白かったという。またシャルロッテは天神(東豊永の名勝天神岳)を見て、「箱庭」のようだったと印象を述べたとも言う。<sup>11</sup> 1927年(昭和2年)、すなわち黒田の里帰りの前年に養父の三谷彦右衛門が亡くなっているため、そのことともこの帰郷は関連していたのかもしれない。

<sup>9</sup> 嘉治隆一「新居格・岡上守道」(「折り折りの人」(8))『朝日新聞』1966年10月27日。

<sup>10</sup> この点については、中村論文では「シャルラ・ハルトゥング」(中村采女「あるドイツ文学紹介者―黒田礼二について―(3)」)となっていて、日本で絵画の展示もしたという。

<sup>11</sup> 渡辺、前掲書、13頁。

このときの帰国に際しては雑誌『新潮』の座談会にも出席しており、文人として日本の文学界から迎えられていたことがわかる。

その後、またベルリンに戻り、『朝日新聞』の特派員を1936年（昭和11年）4月まで勤めてから、帰国、東京、高知で一家三人で生活していたようである。（巻末図2）朝日新聞社退職後、親ドイツ的雑誌を個人刊行していたが、故郷高知に帰って衆議院選挙に無所属で立候補し落選、その後『高知新聞』の論説部に入ったとされている。

しかしながら、黒田の高知の新聞社入りの時期については、疑義がある。「閑人調」（『高知新聞』1986年9月20日）の筆者が当時『高知新聞』編集長だった中島成功から聞いた話として伝えているところによると、「昭和10年代中ごろ朝日をやめて高知新聞の論説を担当したこともあったそう」で、その頃、中島は黒田の家を訪ねていったとある。実際は、黒田は朝日新聞社をもっと前に辞めており、その後、1936年（昭和11年）から雑誌『日独旬刊』を刊行し始めて、1940年までそれを続けていた。この発行所は東京の日独旬刊社で所在地は銀座1-1銀座アパート内となっていて、編集兼発行人は「岡上守道」としていた。この雑誌はドイツとの友好を図る趣旨の雑誌だったが、これを東京で発行編集していたため、この雑誌刊行をやめてから、黒田は高知新聞社に移ったのであろう。すると、昭和11年に朝日新聞社をやめ、相当経ってから黒田は高知新聞社に移っているはずだ。おそらくそれは1940年（昭和15年）ごろだったのではないか。

高知新聞社の社史ならびに関係者の文献<sup>12</sup>からみると、黒田が『高知新聞』のちに『土陽新聞』に就職した経緯が、ある程度明らかになる。

『野中楠吉翁』によると、「当時高知新聞社では国際問題に通暁する記者の必要性から。朝日新聞の論説部にいた黒田を、国際関係の調査をする部署だった同盟通信の記者福田義郎を介して迎えることとなり、黒田は主筆格で入社したのであったが、その後退職することとなった時、土陽が再建最中だったので黒田を聘して編集局の強化を図るということとなった次第である」。<sup>13</sup>

昭和10年代前半当時、高知新聞社と土陽新聞社は独立合併問題で揺れていた。黒田が最初は『高知新聞』に、後にライバル紙『土陽新聞』

<sup>12</sup> 『高知新聞50年史』高知新聞社、1954年、『高知新聞100年史』高知新聞社、2004年、『高知県人名事典補遺』高知市民図書館、1972年。

<sup>13</sup> 野中楠吉翁伝記編纂委員会編『野中楠吉翁』高知新聞社、1963年、169頁。



に引き抜かれたということがわかるが、ほどなく両紙は合併し、1941年（昭和16年）10月に『高知新聞』に一本化するのである。黒田がまず『高知新聞』に、その後、『土陽新聞』に移ったということは、したがって、それ以前のこととなる。

黒田が高知に帰り、『高知新聞』に入ったのは、昭和15年（1940年）頃だったのではないか。しかし、渡辺氏の「小伝」では「衆議院選挙後に土陽新聞、高知新聞に入社」したとある。『高知新聞』の連載「ふるさとの先人」131回（1991年2月5日）、「ジャーナリスト・岡上守道」では、昭和15年（1940年）にドイツでヒトラーとの会見の通訳をしてから、その後帰郷、『高知新聞』の論説主筆をつとめるとある。ヒトラー会見とは、1940年に訪独使節団に黒田が通訳として同行したことを指す。すると、彼が『高知新聞』に入り、高知に帰郷したのは1940年以降ということになるが、このあたりがやはりはっきりしない。

1942年4月、高知で大政翼賛会の推薦を受けずに無所属で衆議院議員に立候補し、落選している。その後、帰郷し、『高知新聞』、そして『土陽新聞』に入社したとなると、つじつまがあわない。なぜなら、41年10月には『土陽新聞』はもうなくなっていたからだ。ということは、やはり黒田は『高知新聞』と『土陽新聞』には41年10月以前に入社していたということになる。ちなみに、『土陽新聞』社長の野村茂久馬が大政翼賛会高知支局長を務めていたのに、42年の衆議院選で大政翼賛会から推薦を受けられなかったことから見ると、黒田は『土陽新聞』側と折り合いがよくなかったのかもしれない。また渡辺氏によると、大蔵大臣をしていた大学の同級の賀屋興宜に対して、「あいつが」という対抗意識から出馬を決意したのではないかという。あるいは、無所属出馬ということからは、黒田が大政翼賛会には批判的だった可能性もある。この新聞社入社と選挙については、もう少し調べてみる余地がありそうである。

ここまでのところから推論するに、彼が高知で新聞社勤務をしていたのは、1940年（昭和15年）から41年（昭和16年）にかけてのごく短い期間だったのではないか。

黒田は、その後、1943年に海軍に招集され、南方のパルプの国策会社の経営に参加、出張中、セレベス沖で戦死した。1944年6月24日の『朝日新聞』に「岡上守道氏戦死」という記事が出ている。「元本社員」と紹介し、「遺族は牛込区江戸川同潤会アパートに閨秀画家シャルロッ

テ夫人と一女がある」としている。黒田一家が戦時中、東京に住んでいたことがわかる。

妻シャルロッテは1942年に、ハウフの童話をモチーフにした自作の版画集を出版している。(巻末図3参照)その表紙には「岡上シャルロッテ(コルベルク)カラ」という自筆の献辞が書かれている。<sup>14</sup>戦後1948年に、このドイツ人の妻シャルロッテは娘夫婦とともに遺骨を抱いて高知の大豊・粟生に黒田の母の家にやってきて、その墓所に遺骨を収めてもらった。そしてその後、アメリカに渡っていったという。<sup>15</sup>

同上の『高知新聞』で連載「ふるさとの先人」として書かれた「ジャーナリスト・岡上守道」には、黒田の小伝を書いた渡辺氏の談話も載っている。それによると、渡辺氏は戦後シャルロッテが娘夫婦をともなって大豊の役場に訪ねてきたときに、その姿を実際に見ている。「丸顔の目の美しい人」だったという。

### 3. 黒田礼二と故郷

「国際人」とはなにか。外国語ができて、コミュニケーション能力があり、海外と行き来があり、自文化も理解し、自国を英語ないしは外国語で表現でき、幅広い視野と知識を身に付けている人とすれば、黒田はまさに「国際人」だった。ヨーロッパでの生活も長く、しかも、妻はドイツ人だった。しかし一方で、頻繁に日本にも帰ってきており、晩年は故郷にも身を寄せたように、根無し草となってしまったわけでもなさそうだ。

こうした黒田から学べることは、国境を自由に行きかう国際派であっても、民族主義、国粋主義になりうるということ、マイノリティへの共感があっても、社会的公平を理解していても、ナチスの本質は見抜けなかったということだろうか。そうやってしまうのは、簡単だが、筆者にはまだじっくりしないものが残った。

黒田はグローバルに活躍し、地域にも貢献しようとした。たしかに彼は放浪者であり、根無し草(デラシネ)であったのかもしれない。満鉄調査部の元同僚で、朝日新聞社の出版局長だった嘉治隆一は岡上について「日本人には珍しいコスモポリタン」で「神出鬼没、つかみどころの

<sup>14</sup> 『ヴィルヘルム・ハウフの物語のための20枚の複製画』と題して、1942年に東京のルペルト・エンデルレ書房から石版300部限定で刊行されている。

<sup>15</sup> 参考、渡辺、前掲書。

ない性格」だったとしているが、その反面、「シンはなかなかまじめで、しみりしたところがあった」と評している。人を小ばかにしているようにみられることがあり、誤解を招いたとも述べている。<sup>16</sup>

『蝙蝠日記』にみるように、軽妙で皮肉っぽい筆致の中に、弱い者たちへの共感を抱く人だった。まじめさゆえに、時代に翻弄され、転向を繰り返したともいえる。一見すると、そのようにも見える。しかし一方で、家族を大事にし、故郷にも何度も顔を出している。

先述した『高知新聞』1986年9月20日の連載「閑人調」の「酒と温度計」に黒田のことが取り上げられている。それによると、昭和10年代中ごろ、黒田は『朝日新聞』をやめ、『高知新聞』の論説を担当するようになった頃、細君とともに高知で生活していたと考えられる。家を訪ねると日本酒の爛をするのに彼女は温度計の目盛りに神経集中するものだから、酒がおいしくなくなったという。また黒田が土佐教会の名簿に名を連ねていたことを指摘、彼がキリスト教徒だったことがきちんと記録されていないと述べている。「礼二」という名は「レーニン」からとったという説も紹介している。キリスト教入信は学生時代だったが、やはり地元の教会の信者となっていたようである。

キリスト教徒になり、共産主義にかぶれたかと思うと、ナチスに心酔する。そうかと思うと、日本では大政翼賛会には距離を持っていたようである。見栄や名誉心も相当強かったと言う人もいる。あるいはそれは反骨心だったのかもしれない。1942年の衆議院選挙出馬に際しては、大蔵大臣をしていた大学の同級の賀屋興宜に対して、「あいつが」という対抗意識から出馬を決意したのではなかいかというエピソードを先に紹介したが、こういうところには、黒田の名誉心やプライドの高さがうかがえる。

しかしながら、他方で時代の先端に常に身を置こうとするあまり、彼は軽薄さも免れなかったのではないだろうか。自ら主宰した雑誌『日独旬刊』では、たびたび座談会の記録が登場する。そのメンバーを見ると、「黒田」と「岡上」という姓が同じ座談会メンバーとして登場しているものが、いくつか見つかる。たとえば、1940年1月10日の第91号に掲載された「政変八卦座談会」には、「黒田」のほかに「岡上守道」の名前がみえるし、1940年3月25日の96号には「黒田」のほかに、

<sup>16</sup> 嘉治、「新居格・岡上守道」、前掲書。

「岡上房之丞」がいて、さらに「長宗我部」「豊永」の名前もあがっている。会場は「筆山荘」となっている。

メンバーの一人を「岡上守道」としているのは、明らかに作為的だ。メンバーを水増ししたのか、あるいはこの座談会自体が架空のものだった可能性もぬぐいきれない。というのも、他のメンバーには「長宗我部」「豊永」といった高知にまつわる名前があったり、座談会場所を高知に現存した「筆山荘」としていたりで、不自然なところがあるからだ。この雑誌編集においても、かなり恣意的な部分があったと言わざるを得ないだろう。

こうしてみると、彼の人生はなるほど流浪の人生である。しかし黒田は本当に国際的ヴァガボンドだったのか。筆者にはずっと違和感が残っていた。これだけの海外通で海外生活の長かった黒田は、人生の節々で故郷と関わりを持つようとしていた。それはなぜなのか。妻がわざわざ実家ではなく、大豊に彼の遺骨を持っていったのも、黒田の故郷への愛着をくみ取ってのことと推察される。なお、『高知新聞』の1955年11月17日の記事に、「黒田礼二氏追悼集会」の案内が掲載されているように、地元高知では黒田（岡上）について、戦後かなり経ってからも回顧されていたことが知れる。

筆者は、黒田が根無し草だったとは思わない。故郷への愛着は生涯変わらなかった。しかし、彼の場合、その出自ゆえに故郷にとどまることもできなかった。時代の先端を走り、時代の寵児となって派手に生きてきた。しかしその反面、自らの居場所がないという思いを抱きつつ、居場所を求め、転々としたのではないか。故郷への愛着、しかしそこにとどまれない。そしてまた、帰郷後も記者生活は長続きせず、選挙にも落選してしまい、結局また出ていくことになった。そういうジレンマが彼に世界中を放浪させ、思想的にも変転極まりない人生を送らせたのではないだろうか。

おわりに

以上、国際人・黒田礼二について、主として故郷・高知との関連について調査してきたことの報告と考察を試みた。戦前の激動の時代の先端を突っ走った国際人だったが、今となっては、謎につつまれている。筆者は国際人とは何なのか、という現代的問いかけに対するひとつのヒントになるかもしれないと思い、この黒田礼二に関心を持った。

黒田礼二、本名・岡上守道は、父を早くに亡くし、母の仕事の都合で大豊に移り、そこで育った。父方の岡上家の家督を幼くして継いだため、母が再婚したときも、岡上姓のままにされた。養父は守道を地元の師範学校に通わせたかったが、本人が上級学校に進学を強く希望したため、母の実弟を頼って大阪の中学に行く。そのときある義侠の人に見込まれて、勉学を続ける援助を受けたという。東京で帝国大学大学院を出て、得意の語学力を生かして、満鉄調査部に就職した。その後、ベルリンに居を定め、スラム街のルポを書いたり、ヨーロッパ各地の紀行文を書いたり、前衛作家の作品を翻訳したりして、やがて『朝日新聞』の特派員になった。ドイツ事情を送信するうち、台頭しつつあったナチスのヒトラーに二度もインタビューを行い、脚光を浴びた。そのヒトラーから強い感化を受けて、左翼的思想から一転親ナチスの言動をとるようになる。その間、1927～28年に里帰りし、ドイツ人の妻と娘を帰化させた。岡上の実家、大篠の籍に入れている。1936年に『朝日新聞』を退社するとともに、今度は自分で親ナチスの雑誌『日独旬刊』を発刊した。1940年頃に地元の新聞社に招聘されて記者になり、短期間の記者生活の後、衆議院議員選挙に無所属で立候補し落選、その後は東京に戻っていた。召集を受けて、南方開発に従事しようとしていた矢先、戦死している。戦後になって、妻子は黒田の遺骨を大豊の三谷家に持ってきた。現在は、その三谷家の墓地に母の隣に黒田の墓が「岡上守道ノ墓」として立っている。

黒田礼二と故郷・高知との関わりについて今回は、以上のことまで明らかにすることができた。この数奇な運命の国際人も、故郷との関わりで見ると、また違った彼の側面が見えてくるのではないだろうか。今回、黒田の高知時代のことを調査してみて、彼の故郷への意外なこだわりの強さを知ることができた。ただ、黒田についてはまだ謎に満ちている。妻子との関係や高知での生活については、さらに調査してみたい。



図 1 大豊町の三谷家の墓地に立つ黒田礼二（岡上守道）の墓（左）。真ん中が母・免恵の墓、その隣が養父・三谷彦右衛門の墓（筆者撮影）



図 2 三谷家に残っていた黒田一家の写真（妻シャルロツテと娘アントニア浪江と）



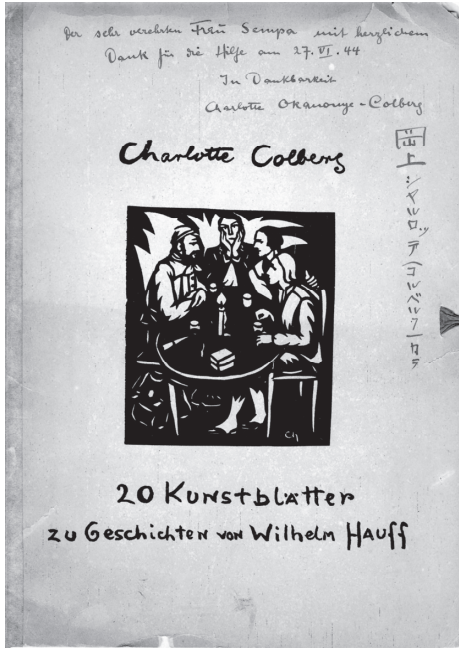


図3 シャルロット・コルベルクの版画集（「岡上シャルロット（コルベルク）カラ」と自筆の献辞がある）

### 謝辞

小論を書くにあたって、インタビューに応じていただき、貴重なお話をうかがわせていただいた渡辺盛男氏に、感謝いたします。